

第136期定時株主総会
その他の電子提供措置事項（交付書面省略事項）

- | | |
|---------------------------------------|----------------|
| ① 事業報告に表示すべき事項のうち以下の事項 | ② 連結株主資本等変動計算書 |
| (i) 直前三事業年度の財産及び損益の状況とその推移 | ③ 連結注記表 |
| (ii) 新株予約権等に関する事項 | ④ 株主資本等変動計算書 |
| (iii) 会計監査人に関する事項 | ⑤ 個別注記表 |
| (iv) 業務の適正を確保するための体制の整備及び当該体制の運用状況の概要 | |

（2022年4月1日から2023年3月31日まで）

日本郵船株式会社

上記事項につきましては、法令及び当社定款第17条第2項の規定に基づき、書面交付請求をいただいた株主様に対して交付する書面への記載を省略しております。

直前三事業年度の財産及び損益の状況とその推移

① 当社グループの財産及び損益の状況

(単位：特記なきものは百万円)

区分	第133期 2019年度	第134期 2020年度	第135期 2021年度	第136期(当期) 2022年度
売上高	1,668,355	1,608,414	2,280,775	2,616,066
経常損益	44,486	215,336	1,003,154	1,109,790
親会社株主に 帰属する当期純損益	31,129	139,228	1,009,105	1,012,523
1株当たり 当期純損益	184.39円	824.55円	5,973.76円	1,993.71円
総資産	1,933,264	2,125,480	3,080,023	3,776,797
純資産	498,839	667,411	1,759,073	2,524,993
1株当たり純資産	2,740.41円	3,703.27円	10,144.29円	4,877.55円

- (注1) 1株当たり当期純損益は期中平均発行済株式の総数により算出しています。また、1株当たり純資産は期末発行済株式の総数により算出しています。なお、発行済株式の総数は、自己株式を除いています。
- (注2) 「役員報酬BIP信託」が保有する当社株式を連結計算書類において自己株式として計上しています。これに伴い、当該信託が保有する当社株式を、期中平均発行済株式及び期末発行済株式の総数から控除する自己株式に含めています。
- (注3) 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第135期の期首から適用しており、第135期以降に係る各数値については、当該会計基準等を適用した後の数値となっています。
- (注4) 第136期の1株当たり当期純損益及び1株当たり純資産は、2022年10月1日を効力発生日として当社の普通株式1株につき3株の割合で分割した株式分割が期首に行われたと仮定して算出しています。

② 当社の財産及び損益の状況

(単位：特記なきものは百万円)

区分	第133期 2019年度	第134期 2020年度	第135期 2021年度	第136期(当期) 2022年度
営業収益	669,905	561,745	777,239	983,554
経常損益	48,935	90,960	434,140	628,651
当期純損益	22,647	38,252	488,220	600,344
1株当たり 当期純損益	134.14円	226.54円	2,890.16円	1,182.09円
総資産	1,308,170	1,333,529	1,592,888	1,726,420
純資産	214,602	249,490	678,184	884,221
1株当たり純資産	1,271.09円	1,477.48円	4,014.44円	1,739.97円

- (注1) 1株当たり当期純損益は期中平均発行済株式の総数により算出しています。また、1株当たり純資産は期末発行済株式の総数により算出しています。なお、発行済株式の総数は、自己株式を除いています。
- (注2) 「役員報酬BIP信託」が保有する当社株式を計算書類において自己株式として計上しています。これに伴い、当該信託が保有する当社株式を、期中平均発行済株式及び期末発行済株式の総数から控除する自己株式に含めています。
- (注3) 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を第135期の期首から適用しており、第135期以降に係る各数値については、当該会計基準等を適用した後の数値となっています。
- (注4) 第136期の1株当たり当期純損益及び1株当たり純資産は、2022年10月1日を効力発生日として当社の普通株式1株につき3株の割合で分割した株式分割が期首に行われたと仮定して算出しています。

新株予約権等に関する事項 (2023年3月31日現在)

該当事項はありません。

会計監査人に関する事項

(1) 会計監査人の名称

有限責任監査法人トーマツ

(2) 当期に係る会計監査人の報酬等の額

区 分	報酬等の額 (百万円)
報酬等の額	207
当社及び当社子会社が支払うべき金銭その他の財産 上の利益の合計額	357

- (注1) 当社監査役会は、会計監査人及び社内関係部門との面談・聴取を通じて、会計監査人が提出した監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠等の相当性について必要な検証を行ったうえ、会社法第399条第1項及び第2項の定めにより会計監査人の報酬等の額に同意しました。
- (注2) 当社と会計監査人との間の監査契約においては、会社法に基づく監査報酬と金融商品取引法に基づく監査報酬の額を区分していませんので、上記の金額には金融商品取引法に基づく監査の報酬等を含めています。
- (注3) 当社は会計監査人に対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務(非監査業務)である、会計に関する助言・指導業務の対価を支払っています。
- (注4) 当社の重要な子会社のうち、(株)ユニエックスNCT、NYK GROUP AMERICAS INC.、NYK GROUP EUROPE LTD.、及びNYK GROUP SOUTH ASIA PTE. LTD.は、当社の会計監査人以外の公認会計士又は監査法人(外国におけるこれらの資格に相当する資格を有する者を含む。)の計算関係書類の監査(会社法又は金融商品取引法(これらの法律に相当する外国の法令を含む。))の規定によるものに限る。)を受けています。

(3) 会計監査人の解任又は不再任の決定方針

当社監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項の各号に該当すると判断した場合に監査役全員の同意によって解任いたします。この場合、解任及びその理由を解任後最初に招集される株主総会において報告いたします。

また、上記のほか、会計監査人による適正な職務の遂行が困難であること、その他会計監査人の変更が相当であると認められる場合には、監査役会は株主総会に提出する会計監査人の解任又は不再任に関する議案の内容を決定いたします。

業務の適正を確保するための体制の整備及び当該体制の運用状況の概要

【業務の適正を確保するための体制】

当社及び当社グループの業務の適正を確保するための体制の整備と運用状況は、内部統制委員会において審議され、当社取締役会が、同体制の整備を決定しています。

1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

(1) コーポレートガバナンスに関する体制

- 1) 取締役会は、社外取締役を含む取締役で構成し、法令、定款及び社内規程等に従い、重要事項を決定し、或いは報告を受ける。
- 2) 取締役会は、取締役の管掌や担当等を決定し、取締役の職務の執行を監督する。
- 3) 監査役は、監査役会規則、及び監査役監査基準に則り、取締役の職務執行の適法性を監査する。

(2) コンプライアンスに関する体制

- 1) 当社グループの企業理念、企業行動憲章を定め、役職員に適用される行動規準、社規則等を制定し、内部通報制度を整備する。
- 2) コンプライアンスに係る体制整備と活動を統轄するチーフコンプライアンスオフィサー（CCO）を設置し、コンプライアンス委員会がコンプライアンス状況を評価する。
- 3) 子会社等においても同様の体制整備を促進する。

(3) 財務報告に関する体制

- 1) 適正な会計処理と財務報告のための方針、業務規程等を定める。
- 2) 内部統制報告制度や情報開示に係る委員会が、財務報告の適正性を確保するための体制の整備と運用状況を評価する。

(4) 内部監査に関する体制

内部監査担当部署が、内部監査に係る規則や基準等に基づき、当社及び子会社等の業務全般を、定期的に監査する。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

株主総会や取締役会議事録等、取締役の職務執行に係る重要な文書は、担当部署が適切に保存及び管理し、取締役及び監査役は、これらの文書をいつでも閲覧できる。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) 安全を最重要課題と位置付け、海・陸・空の事業領域毎に最適な安全管理体制を整備する。
- (2) リスク管理に係る方針と規則を定め、リスク管理委員会が、当社グループの重要リスクと管理本部を決定し、リスク傾向と対策の妥当性を評価する。

4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- (1) 執行役員制を採用し、執行役員が取締役会及び代表取締役からの委任に基づき、担当職務を執行する。
- (2) 取締役及び執行役員の管掌又は担当、社内各組織の業務分掌、役職員の職務権限及び取締役会等への付議基準、並びに役位毎の決裁基準を定める。

5. 日本郵船グループにおける業務の適正を確保するための体制

- (1) 各子会社等を管掌する部署が、子会社等の管理に係る社内規程に従い、各子会社等の経営管理等を行う。
- (2) 当社から各子会社等に、取締役及び監査役を派遣して業務の適正を確保する。
- (3) 子会社等の役職員も当社の内部通報制度を利用でき、子会社等で発生したコンプライアンス事案は、社内規程に従って当社に報告される。

6. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項、当該使用人の当社取締役からの独立性に関する事項、及び当社監査役の当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項
 - (1) 監査役会に直属して監査役の職務執行を補助する部署を設置し、専任の使用人を配置する。
 - (2) 当該使用人は監査役の指揮命令下であり、その人事考課は、常勤監査役が行う。また、当該使用人の人事異動及び懲戒処分は、監査役の意見を最大限尊重する。
7. 監査役への報告に関する体制、及び報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
 - (1) 監査役は取締役会、経営会議、その他重要な社内会議に出席し、意見を表明できる。
 - (2) 当社グループに著しい損害が発生するおそれがある場合の、取締役及び執行役員による監査役会への報告義務を、社内規程で定める。
 - (3) 当社グループのコンプライアンス事案の、役職員による監査役への報告体制を整備する。
 - (4) 内部通報者に関わる身元の秘匿と不利益取扱いを禁止する社内規程を整備する。
8. 監査役職務の執行について生ずる費用の処理等に係る方針に関する事項、及びその他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
 - (1) 監査役職務執行に必要な費用は、会社が負担する。
 - (2) 内部監査を担当する組織は、監査役との間で、監査計画の策定や内部監査結果等につき、緊密に情報交換及び連携を図る。

【業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要】

内部統制委員会で確認された、内部統制上重要と考える取組みは以下のとおりです。

1. 取締役等の職務の執行の適法性と効率性確保の取組み

- (1) 取締役会は、取締役会規則や付議基準等に基づいて運営され、取締役等の選解任や報酬については、指名諮問委員会や報酬諮問委員会における協議結果を踏まえて決定している。
- (2) 取締役会の実効性向上のため、取締役及び監査役へのアンケートを実施するとともに取締役会のあり方の検討を行い、2023年6月開催予定の定時株主総会における承認可決を条件として、監査等委員会設置会社への移行を取締役会で決定した。
- (3) 取締役会は経営計画を決定し、業務執行取締役及び執行役員は、当該計画に沿って事業運営方針を策定し、実行している。

2. コンプライアンスに関する取組み

- (1) チーフコンプライアンスオフィサー（CCO）は、コンプライアンス活動の年度方針と計画を策定し、期初のコンプライアンス委員会において承認を得ている。活動の状況、内部通報やコンプライアンス対応実績等は、期中のコンプライアンス委員会、遵法活動徹底委員会において確認され、その概況は取締役会に報告されている。
- (2) 当社役職員にコンプライアンス意識調査を実施するとともに行動規準遵守の誓約を求め、役職員の職責等に応じたコンプライアンス教育・研修を実施する等、コンプライアンスを重視する個人の意識と企業文化の醸成に努めている。
- (3) コンプライアンス事案が発生した場合の対処等に関する社内規則に基づき、有事には速やかな是正と再発防止の実施を図り、重要な案件については、前記社内規則の細則に定めた報告基準に基づき、コンプライアンス委員会を通じ取締役会に報告している。

3. 財務報告に関する取組み

- (1) 内部統制委員会に専門の部会を設置し、財務報告に関する信頼性の検証と内部統制報告書案を審議している。
- (2) 適時適切な開示のため、四半期毎に開催する情報開示委員会において、開示内容等について報告を行い、内部統制の整備及び運用状況の有効性評価を実施している。

4. 内部監査に関する取組み

- (1) 内部監査の結果は、監査対象の部門や子会社等に報告され、指摘事項について必要な対応が取られている。また、取締役会及び社長は、内部監査の結果と指摘事項への対応状況について報告を受けている。
- (2) 監査業務の有効性と効率性を確保するために、IT技術を活用した監査手法の高度化を図っている。

5. 情報管理、情報セキュリティに関する取組み

- (1) 情報管理については、内容の重要度に応じて閲覧手続き及び閲覧権限と保存期間を定め、効率的な事務処理と情報の共有化に努めている。
- (2) 情報の窃取やシステムの機能停止等を目的とするサイバー攻撃に対しては、セキュリティ対策の強化に加え、定期的な訓練等を実施し、グローバルな管理体制の構築を進めている。また、情報セキュリティ教育・啓発のためのeラーニングと標的型攻撃メール訓練等を実施している。

6. 安全とリスク管理に関する取組み

- (1) 海・陸・空の事業領域において「重大事故ゼロ」の目標を掲げ、安全管理のルールと仕組みを整備し、これらに基づき安全推進活動を行っている。船舶については、当社の安全基準に基づく監査を実施し、安全水準の維持、向上に努めている。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止と円滑な船員交代に向けた施策を実施している。これらの活動については、安全・環境対策推進委員会が定期的に評価を行っている。
- (2) リスク管理委員会において、現在のリスク管理状況と顕在化したリスク対策の妥当性を検証している。また、リスク一覧を更新し、リスク傾向や一定の基準等を踏まえ、翌事業年度における重要リスクを選定しリスク管理本部を決定するとともに、それら重要リスク対策の妥当性を検証している。
- (3) リスク管理の実効性向上の為、管理手法の中長期的なあり方の議論や改善を実施している。
- (4) リスク管理において、外部専門家の知見を積極的に活用している。

7. 日本郵船グループにおける業務の適正確保に関する取組み

- (1) 日本郵船グループ共通の企業理念、行動憲章に基づき、各子会社等で行動規準を定めている。また、各子会社等の役職員から、各社の行動規準遵守に係る誓約を得ている。
- (2) 当社グループ運営上の基本事項に係る指針を定めた上で、子会社等が遵守又は参照すべき、会社運営、経理、コンプライアンス等、コーポレート関係の事項に関するスタンダードを定め、その遵守状況を定期的に監査又は調査している。
- (3) 子会社等において、当社又は各社の内部通報窓口を周知し、利用を促進している。また、法務・コンプライアンスに係る研修の機会を、子会社等に提供している。

8. 監査役監査に関する取組み

- (1) 当社の監査役室は監査役会に直属し、所属する専任の使用人は、監査役監査の補佐、監査役会の運営事務局等、監査役の補助業務を行っている。当該使用人は、監査役の指揮命令下にあり、その人事考課は常勤監査役が行う等、執行部門からの独立性を確保している。
- (2) 監査役は、取締役会や経営会議等の重要会議に出席して意見を述べ、議事録や稟議書等の重要書類の閲覧や、関係者への聴取等により情報を収集している。
- (3) 当社及び当社グループのコンプライアンス事案や内部通報の管理状況は、監査役に定期的に報告されている。
- (4) 社規則に従い、内部通報者の身元は秘匿されている。
- (5) 監査役は、会計監査人及び内部監査部門と相互に情報交換し、三者の監査の連携を通じて、監査役監査の実効性及び効率の向上に努めている。
- (6) 監査の実効性確保の為、監査役の職務執行に必要な費用は、会社が負担している。

連結株主資本等変動計算書 (2022年4月1日から2023年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額					非支配株主持分	純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額金	繰延 ヘッジ損益	為替換算 調整勘定	退職給付に 係る調整 累計額	その他の 包括利益 累計額合計		
当期末残高	144,319	44,314	1,396,300	△3,428	1,581,506	32,136	△15,452	85,785	29,737	132,207	45,359	1,759,073
当連結会計年度中の変動額												
剰余金の配当			△389,957		△389,957							△389,957
親会社株主に帰属する当期純利益			1,012,523		1,012,523							1,012,523
自己株式の取得				△1,537	△1,537							△1,537
自己株式の処分		1		1,173	1,174							1,174
非支配株主との取引に係る親会社の持分 変動		703			703							703
連結範囲の変動			11		11							11
その他		△122	37		△85							△85
株主資本以外の項目の当連結会計年度中 の変動額（純額）						773	22,035	121,652	△2,365	142,094	993	143,087
当連結会計年度中の変動額合計	-	582	622,614	△364	622,832	773	22,035	121,652	△2,365	142,094	993	765,920
当期末残高	144,319	44,897	2,018,915	△3,793	2,204,338	32,909	6,583	207,437	27,371	274,302	46,352	2,524,993

連結注記表

(1) 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項等

① 連結の範囲に関する事項

(i) 連結子会社の数： 493社

主要な連結子会社の名称

主要な連結子会社は、事業報告「1. 当社グループの現況に関する事項 (9)重要な企業結合の状況 ②重要な子会社の状況」に記載のとおりです。

連結の範囲の変更

NYK MULTIMODAL TRANSPORTATION (SHANGHAI) CO., LTD.他12社は、新たに設立したため、連結の範囲に含めています。

(株)ユニエツクス・エンジニアリング他18社は、総資産、売上高、純利益及び利益剰余金等とも重要性が生じたため、連結の範囲に含めています。

TAYLORED SERVICES PARENT CO. INC.他10社は、株式の取得により、連結の範囲に含めています。

NYK LNG SHIPPING NO.1 LTD.他2社は、株式の取得のため、持分法適用関連会社から連結子会社へ変更しています。

横浜貿易建物(株)他37社は、会社を清算したため、連結の範囲から除外しています。

NYK LINE (INDIA) PVT. LTD.は、2022年9月21日付でNYK AUTO LOGISTICS (INDIA) PVT. LTD.と合併したため、連結の範囲から除外しています。

ジャパンメンテナンスアンドリペア(株)は、2022年10月1日付で(株)ユニエツクス・エンジニアリングと合併したため、連結の範囲から除外しています。

CERES HALIFAX INC.は、株式売却のため、連結の範囲から除外しています。

(ii) 主要な非連結子会社の名称

特記すべき主要な非連結子会社はありません。

(iii) 非連結子会社について連結の範囲から除いた理由

非連結子会社の総資産の合計額、売上高の合計額、純利益の額のうち持分の合計額及び利益剰余金の額のうち持分の合計額等は、連結会社の総資産の合計額、売上高の合計額及び純利益、利益剰余金の額のうち持分の合計額等に比していずれも少額であり、全体としても連結計算書類に重要な影響を及ぼしていないため除外しています。

② 持分法の適用に関する事項

(i) 持分法適用会社の数

非連結子会社： 3社

関連会社： 205社

主要な持分法適用会社の名称

主要な関連会社は、事業報告「1. 当社グループの現況に関する事項 (9)重要な企業結合の状況 ③主要な関連会社の状況」に記載のとおりです。

持分法の適用範囲の変更

NST ORCA INCは、新たに設立したため、持分法適用の範囲に含めています。

MERO 2 OWNING B.V.他3社は、総資産、売上高、純利益及び利益剰余金等とも重要性が生じたため、持分法適用の範囲に含めています。

NYK LNG SHIPPING NO.1 LTD.他2社は、株式の取得のため、持分法適用関連会社から連結子会社へ変更しています。

トランスオーシャン・エルエヌジー輸送(株)他4社は、会社を清算したため、持分法適用の範囲から除外しています。

KNOT SHUTTLE TANKERS 28 GP ASは、2022年7月14日付でKNOT SHUTTLE TANKERS 35 ASと合併したため、持分法適用の範囲から除外しています。

(ii) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社

特記すべき主要な非連結子会社及び関連会社はありません。

(iii) 持分法非適用会社について持分法適用の範囲から除いた理由

持分法非適用の非連結子会社及び関連会社の純利益の額及び利益剰余金の額のうち持分の合計額等は、連結会社及び持分法適用会社の純利益の額のうち持分の合計額に比して少額であり、また利益剰余金等に及ぼす影響も軽微であり、全体としても連結計算書類に重要な影響を及ぼしていないため除外しています。

- (iv) 持分法の適用の手続について特に記載する必要があると認められる事項
 決算日が12月31日の持分法適用会社のうち、1社については、連結決算日現在で実施した仮決算に基づく計算書類を使用しています。
 上記以外の決算日が連結決算日と異なる会社については、各社の事業年度に係る計算書類を使用しています。

- ③ 連結子会社の事業年度等に関する事項
 連結子会社のうち決算日が12月31日の会社42社については、同日現在の計算書類を使用しており、連結決算日との間に生じた重要な取引については連結上必要な調整を行っています。
 また、決算日が12月31日の会社21社については、連結決算日現在で実施した仮決算に基づく計算書類を使用しています。
 なお、当連結会計年度より、連結子会社K.R.C. TRANSPORT & SERVICE CO., LTD.は決算日を3月31日から12月31日に変更しています。SHANGHAI YUSEN LOGISTICS SERVICE (W.G.Q) CO., LTD.他5社は決算日を12月31日から連結決算日に仮決算を行う方法に変更しています。

12月31日決算の主要な会社
 NYK LINE (CHINA) CO., LTD.

④ 会計方針に関する事項

- (i) 重要な資産の評価基準及び評価方法
 有価証券

満期保有目的の債券

償却原価法（主として定額法）

その他の有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法

デリバティブ

時価法

棚卸資産

主として先入先出法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）

- (ii) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

主として定額法

無形固定資産（リース資産を除く）

ソフトウェア

主として社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法

その他

主として定額法

リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産

自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法

なお、一部の在外連結子会社についてはIFRS第16号「リース」又はASU第2016-02号「リース」を適用しています。

当連結会計年度より適用しているASU第2016-02号「リース」については、「(2)会計方針の変更に関する注記」に記載しています。これにより原則として、借手におけるすべてのリースを連結貸借対照表に資産及び負債として計上しており、資産計上された使用权資産の減価償却方法は定額法によっています。

- (iii) 重要な繰延資産の処理方法

社債発行費

社債償還期間にわたり月割償却しています。

- (iv) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しています。

賞与引当金

従業員に支給する賞与に充てるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度の負担額を計上しています。

役員賞与引当金

役員に支給する賞与に充てるため、将来の支給見込額のうち当連結会計年度の負担額を計上しています。

役員退職慰労引当金	役員の退職慰労金の支出に備えるため、一部の連結子会社において内規に基づく期末要支給額を計上しています。
株式給付引当金	株式交付規程に基づく取締役及び執行役員への当社株式の給付等に備えるため、当連結会計年度末において対象者に付与されるポイントに対応する当社株式の価額を見積り計上しています。
特別修繕引当金	船舶の特別修繕に要する費用の支出に備えるため、船舶の将来の見積修繕額に基づいて計上しています。
契約損失引当金	定期備船契約や賃貸借契約の履行又は期限前返船等、並びに固定資産の購入に伴い発生する損失に備えるため、将来の損失見込額を計上しています。
事業再編関連引当金	事業の再編等に伴う損失に備えるため、将来の損失見込額を計上しています。

(v) 退職給付に係る会計処理の方法

i 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、主として、給付算定式基準によっています。

ii 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として8年）による定額法により費用処理することとしています。数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として8年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の日連結会計年度から費用処理することとしています。

(vi) 重要な収益及び費用の計上基準

顧客との契約について、以下の5ステップアプローチに基づき、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に権利を得ると見込む対価の額で収益を認識しています。

ステップ1：顧客との契約を識別する

ステップ2：契約における履行義務を識別する

ステップ3：取引価格を算定する

ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する

ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する

(全事業全般)

当社グループは、主に定期船事業、不定期専用船事業、航空運送事業、物流事業、不動産業及びその他の事業を営んでいます。

履行義務の識別にあたっては、本人か代理人かの検討を行っており、顧客との約束の性質が、特定された財又はサービスを自ら提供する履行義務である場合には、本人として収益を対価の総額で認識しており、それらの財又はサービスが他の当事者によって提供されるように手配する履行義務である場合には、代理人として収益を対価の純額で認識しています。

顧客からの対価は、通常、履行義務の充足時点から、1年以内に支払いを受けています。なお、重要な金融要素は含まれていません。

取引価格は、約束した財又はサービスの顧客への移転と交換に当社グループが権利を得ると見込んでいる対価の金額で測定し、変動対価が含まれています。なお、顧客との契約における対価に変動対価が含まれる場合には、当該変動対価に関する不確実性が事後的に解消される際に、解消される時点までに計上された収益の著しい減額が発生しない可能性が高い部分に限り、取引価格に含めています。

取引価格の履行義務への配分は、約束した財又はサービスを顧客に移転するのと交換に権利を得ると見込んでいる対価の金額を描写する金額で取引価格を各履行義務へ配分しています。取引価格を各履行義務に独立販売価格の比率で配分するため、契約における各履行義務の基礎となる別個の財又はサービスの契約開始時の独立販売価格を算定し、取引価格を当該独立販売価格に比例して配分しています。

収益を認識するにあたっては、定期船事業、不定期専用船事業、航空運送事業、物流事業及びその他の事業について、顧客との契約に基づき履行義務を識別しており、一時点で履行義務を充足し収益を認識する他、主に一定の期間にわたり充足される履行義務として、進捗度を見積り、当該進捗度に基づき収益を一定の期間にわたり認識しています。通常は下記の時点で、当社グループの履行義務を充足すると判断し収益を認識しています。また、ステップ1からステップ5に関する事項で、事業別に記載することがより適切であると判断した事項は、下記に記載をしています。

(1)海運業に係る収益（定期船事業、不定期専用船事業）

海運業（定期船事業、不定期専用船事業）については、備船契約等（連続航海備船契約・数量輸送契約・個品運送契約・定期備船契約等）の契約に基づき、顧客に対して、運送サービス等を提供しており、主に一定の期間にわたり充足される履行義務であると判断しています。運送サービス（定期備船除く）の場合は、航海期間における日数に基づき、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積り、収益を認識しています。なお、運送サービスのうち、不定期専用船事業の一部については、一航海の船舶が発港地を出発してから帰港地に到着するまでの期間が通常の間（運送サービスの履行に伴う空船廻航期間を含み、運送サービスの履行を目的としない船舶の移動又は待機期間を除く。）である場合には、複数の顧客の貨物を積載する船舶の一航海を単一の履行義務としたうえで、当該期間にわたり収益を認識しています。定期備船の場合は、現在までに履行が完了した部分に対する顧客にとっての価値に直接対応する対価の額を顧客から受け取る権利を有しているため、請求する権利を有している金額で収益を認識しています。

顧客からの対価は、定期備船の場合は、通常、履行義務の提供前に顧客から収受し、収受より1年以内に履行義務を充足しています。定期備船以外の場合は、通常、履行義務の充足時点から1年以内に支払いを受けています。なお、重要な金融要素は含んでいません。

取引価格は、主に航海数、運賃率、滞船料及び早出料等の変動要素があり、変動対価を含みます。

連続航海備船契約及び数量輸送契約に係る変動対価（取引価格）の履行義務への配分は、変動性のある支払の条件が、航海ごとの運送サービスに個別に関連していること及び契約における履行義務及び支払条件のすべてを考慮した場合、個別の航海ごとに発生する変動対価の額のすべてを個別の航海ごとの運送サービスに配分することが、権利を得ると見込む対価の額を描写するため、個別の航海ごとの運送サービスへ配分しています。

なお、裸備船契約については、主にリース取引に係る収益であり、収益認識に関する会計基準等の対象外のため、リース取引に関する会計基準等に従い、収益を認識しています。

(2)航空業に係る収益（航空運送事業）

航空運送事業については、輸送サービス契約等の契約に基づき、顧客に対して、航空機貨物輸送サービス等を提供しており、主に一定の期間にわたり充足される履行義務であると判断しています。航空機貨物輸送サービスの場合は、輸送期間における日数に基づき、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積り、収益を認識しています。

(3)物流業に係る収益（物流事業）

物流事業については、運送契約等の契約に基づき、顧客に対して、国際貨物輸送サービス（海上・航空）及びロジスティクスサービス（陸運・倉庫）等を提供しており、主に一定の期間にわたり充足される履行義務であると判断しています。国際貨物輸送サービス（海上・航空）の場合は、船舶及び航空機の運送期間等における日数等に基づき、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積り、収益を認識しています。また、ロジスティクスサービス（陸運・倉庫）の場合は、運送期間、保管期間等における日数等に基づき、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積り、収益を認識しています。

(4)その他の収益（不動産業、その他の事業）

その他の事業については、顧客に対して、主に船舶燃料の補油サービス、燃料販売等を提供しており、当該履行義務は、受渡時点において、顧客が船舶燃料の補油サービス、燃料販売等に対する支配を獲得し、履行義務が充足されると判断し、当該時点で収益を認識しています。

なお、不動産業については、不動産賃貸業等を営んでおり、これは主にリース取引に係る収益であり、収益認識に関する会計基準等の対象外のため、リース取引に関する会計基準等に従い、収益を認識しています。

(vii) 重要なヘッジ会計の方法

資産及び負債、予定取引における金利変動リスク、為替変動リスクあるいはキャッシュ・フロー変動リスクを相殺するためのデリバティブ取引等に対し、ヘッジ会計を適用しています。また、燃料油購入等における価格変動リスクに備えるためのデリバティブ取引についても、同様にヘッジ会計を適用しています。その方法は、繰延ヘッジを採用していますが、為替予約等のうち所定の要件を満たすものについては振当処理を、金利スワップ等のうち所定の要件を満たすものについては特例処理を行っています。

なお、借入金・社債等の金利変動リスクに対しては金利スワップ等を、金銭債権債務・在外子会社等への投資・予定取引等の外貨建取引の為替変動リスクに対しては通貨スワップ・為替予約・外貨建金銭債権債務等を、燃料油等の価格変動リスクに対してはスワップ等をヘッジ手段としています。ヘッジ有効性の評価は、毎四半期末にヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計の比率分析を行う方法によっています。ただし、特例処理によっている金利スワップ等については、有効性の評価を省略しています。

上記のヘッジ関係のうち、「LIBORを参照する金融商品に関するヘッジ会計の取扱い」（実務対応報告第40号 2020年9月29日）の適用範囲に含まれるヘッジ関係のすべてに、当該実務対応報告に定められる特例的な取扱いを適用しています。当該実務対応報告を適用しているヘッジ関係の内容は、以下のとおりです。

ヘッジ会計の方法…繰延ヘッジ処理、特例処理

ヘッジ手段…金利スワップ、通貨スワップ

ヘッジ対象…未払金、借入金

ヘッジ取引の種類…相場変動を相殺するもの、キャッシュ・フローを固定するもの

(viii) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間～20年間の均等償却を行っています。

(ix) その他連結計算書類の作成のための重要な事項

i 支払利息の処理方法

支払利息については原則として発生時の費用処理としていますが、長期かつ金額の重要な事業用資産で一定の条件に該当するものに限って建造期間中の支払利息を事業用資産の取得原価に算入しています。

ii グループ通算制度の適用

当社及び一部の国内連結子会社は、当連結会計年度からグループ通算制度を適用しています。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第42号 2021年8月12日）に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っています。

(2) 会計方針の変更に関する注記

(ASU第2016-02号「リース」の適用)

米国会計基準に準拠した計算書類を作成している関係会社において、当連結会計年度よりASU第2016-02号「リース」を適用しています。これにより、借手におけるほとんどすべてのリースを連結貸借対照表に資産及び負債として計上しています。

当該会計基準等の適用により、当連結会計年度の期首において、主として建物及び構築物が19,889百万円、土地が20,305百万円、流動負債のその他が9,574百万円、固定負債のその他が31,074百万円増加しています。利益剰余金に与える影響は軽微です。

なお、当連結会計年度の連結損益計算書への影響は軽微です。

(時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。）を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することとしました。

なお、これによる連結計算書類への影響はありません。

(3) 収益認識に関する注記

①顧客との契約から生じる収益を分解した情報

当社グループは、主に定期船事業、不定期専用船事業、航空運送事業、物流事業、不動産業及びその他の事業を営んでいます。また、各事業の主な財又はサービスの種類は、これらの事業と同様の情報であるため、記載を省略しています。なお、当連結会計年度の連結損益計算書に計上している「売上高」は、主に「顧客との契約から生じる収益」です。それ以外の源泉から認識した収益は、主にリース取引に係る金額であり、その金額に重要性がないため売上高に含めて開示しています。当連結会計年度の各事業の売上高は、次のとおりです。

当連結会計年度（自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）

（単位：百万円）

	ライナー&ロジスティクス事業			不定期専用船事業	その他事業		調整額 (注)	合計
	定期船事業	航空運送事業	物流事業		不動産業	その他の事業		
売上高	200,705	218,095	862,446	1,240,816	3,352	234,512	△143,863	2,616,066

(注) 事業部門間の内部売上高又は振替高を相殺しています。

②顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

「(1) 連結計算書類作成のための基本となる重要な事項等」④会計方針に関する事項 (vi) 重要な収益及び費用の計上基準」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しています。

③当連結会計年度及び翌連結会計年度以降の収益の金額を理解するための情報

(i) 顧客との契約から生じた債権、契約資産及び契約負債の期首残高及び期末残高

当連結会計年度の顧客との契約から生じた債権、契約資産及び契約負債の期首残高及び期末残高の内訳は次のとおりです。

（単位：百万円）

	当連結会計年度期首	当連結会計年度末
顧客との契約から生じた債権 (※)	335,673	319,011
契約資産	23,485	18,691
契約負債	39,792	50,562

(※) 顧客との契約から生じた債権には、リース取引等に係る金額が含まれていますが、その金額に重要性がないため顧客との契約から生じた債権に含めて開示しています。

当社グループが通常の営業活動において、顧客に移転した財又はサービスと交換に受取る対価に対する権利のうち、時の経過以外の条件が付されているものを契約資産として表示しています。契約資産は通常、顧客が対価を支払う、又は支払期限が到来する前に当社グループが財又はサービスを顧客へ移転する場合に増加し、対価に対する当社グループの権利が無条件になることにより減少します。当社グループが通常の営業活動において、顧客に財又はサービスを移転する義務のうち、顧客から対価を受取っている、又は対価の期限が到来しているものを契約負債として表示しています。また、定期備船を除いた、定期船事業、不定期専用船事業においては、主として、顧客からの貨物を積港にて船舶へ搭載した時点で運賃（滞船料及び早出料等除く）が法的な請求権として確定します。契約資産は、運送サービス（定期備船除く）の期間に空船廻航期間を含む不定期専用船事業の一部取引で発生し、主として、顧客からの貨物を積港にて船舶へ搭載した時点で、顧客との契約から生じた債権に振り替えられます。

契約負債は通常、当社グループが財又はサービスを顧客に移転する前に、顧客から対価を受取った場合に増加し、当社グループが履行義務を充足することにより減少します。契約負債の減少要因は、主として履行義務の充足によるものです。契約負債の増加要因は、主として前受の増加によるものです。

当連結会計年度に認識した収益のうち、当連結会計年度期首の契約負債残高に含まれていたものは、35,917百万円です。また、当連結会計年度において、過去の期間に充足した履行義務から認識した収益の金額に重要性はありません。

(ii) 残存履行義務に配分した取引価格

実務上の便法を適用し注記を省略した取引を除き、当連結会計年度末における残存履行義務に配分した取引価格の総額に重要性はありません。なお、顧客との契約から受け取る対価の額に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

また、以下の残存履行義務に配分した取引価格に関しては、実務上の便法を適用し注記を省略しています。海運業（定期船事業、不定期専用船事業）に係る連続航海備船契約及び数量輸送契約については、市場環境の変化による影響を安定化させる観点から、顧客との長期契約に重点を置いています。一方、当該連続航海備船契約及び数量輸送契約に係る収益は、取引価格に航海数、運賃率等の変動要素があることから変動対価に該当します。当該変動対価は、収益認識に関する会計基準第72項の要件に従って、個別の航海ごとの運送サービスに配分される変動対価であるため、完全に未充足の履行義務に配分される変動対価として、注記を省略しています。当該変動対価は履行義務の進捗につれて解消され、最長25年以内に収益計上します。

定期備船契約については、提供した時間に基づき顧客に請求する権利を有する契約であり、収益認識に関する会計基準の適用指針第19項に従って、請求する権利を有している額で収益を認識しているため、注記を省略しています。

当初に予想される契約期間が1年以内の契約については、注記を省略しています。

(4) 会計上の見積りに関する注記

固定資産の減損

・当連結会計年度の固定資産計上額は、主に船舶637,257百万円、航空機98,573百万円です。

・その他見積りの内容に関する理解に資する情報

減損の兆候を識別した資産又は資産グループ（以下、資産グループ）について、減損損失の測定を実施しており、その際の回収可能価額は使用価値又は正味売却価額により算定しています。使用価値は、将来キャッシュ・フローの割引現在価値として算定しています。将来キャッシュ・フローの基礎となる事業計画等における重要な仮定は、主として運賃、備船料等の市況、及び貨物需要等に関する将来の見通しです。

また、将来キャッシュ・フローの算定期間は当該資産グループに属する船舶、航空機等の平均残存耐用年数を基礎としています。採用した割引率は、主に資本コストを基礎として算定しています。正味売却価額は主に経営者が利用する専門家による評価結果を基礎として算定しています。

運賃、備船料等の市況、及び貨物需要等に関する将来の見通しが悪化した場合や船舶、航空機等の評価額が低下した場合には新規又は追加の減損損失を計上する可能性があります。

繰延税金資産の回収可能性

・当連結会計年度の繰延税金資産計上額は、9,120百万円です。

・その他見積りの内容に関する理解に資する情報

将来減算一時差異及び税務上の繰越欠損金に対して、将来の課税所得を見積り、繰延税金資産の回収可能性を判断しています。

将来の課税所得の見積りの基礎となる事業計画における重要な仮定は、運賃、備船料等の市況、及び貨物需要等に関する将来の見通しです。

事業計画の前提となっている運賃、備船料等の市況、及び貨物需要等に関する将来の見通しが悪化した場合には、繰延税金資産の取崩が発生する可能性があります。

(5) 連結貸借対照表に関する注記

① 棚卸資産の内訳

商品及び製品	2,130百万円
仕掛品	428百万円
原材料及び貯蔵品	55,035百万円

② 担保に供している資産及び担保に係る債務

(i) 担保に供している資産

現金及び預金	4,727百万円
受取手形、営業未収入金及び契約資産	6,755百万円
棚卸資産	163百万円
繰延及び前払費用	356百万円
船舶（注）	75,963百万円
建物及び構築物	1,947百万円
機械装置及び運搬具	7,503百万円
器具及び備品	7百万円
土地	730百万円
建設仮勘定	545百万円
有形固定資産の「その他」	787百万円
ソフトウェア	278百万円
投資有価証券（注）	131,246百万円
投資その他の資産の「その他」	329百万円
計	231,342百万円

(ii) 担保に係る債務

支払手形及び営業未払金	23百万円
短期借入金	8,959百万円
流動負債のリース債務	2,559百万円
長期借入金	46,882百万円
計	58,425百万円

(注) 船舶のうち2,485百万円及び投資有価証券のうち130,604百万円は関連会社等の債務の担保目的で差し入れたものです。

③ 有形固定資産の減価償却累計額 1,142,555百万円

④ 偶発債務

(i) 保証債務等 188,505百万円

(ii) 当社グループが船舶に関して締結しているオペレーティング・リース契約の一部には、残価保証の条項が含まれています。残価保証による潜在的な最大支払額は2,553百万円であり、当該オペレーティング・リース契約の購入選択権を行使せずにリース資産を返却することを選択した場合に支払いを実行する可能性があります。なお、当該オペレーティング・リース契約は2025年4月までの間に終了します。

(iii) 当社グループは、独占禁止法違反の疑いがあるとして、2012年9月以降自動車等の貨物輸送に関して海外当局の調査対象となっています。また、完成自動車車両等の海上輸送について、主要自動車船社と共同して運賃を設定したとして、請求金額を特定しないまま損害賠償及び差し止め等を求める集団民事訴訟が複数の地域にて提起されています。海外当局による調査及び民事上の損害賠償請求訴訟については、独禁法関連引当金に計上されたものを除き、現時点ではそれらの結果を合理的に予測することは困難です。

(6) 連結損益計算書に関する注記

減損損失

当社及び連結子会社は、原則として事業用資産においては投資の意思決定を行う事業ごとにグルーピングを行い、賃貸不動産、売却予定資産及び遊休資産等においては個別物件ごとにグルーピングを行っています。
当連結会計年度において、売却予定資産については売却予定価額が帳簿価額を下回ることにより、のれん及び事業用資産については業績の低迷等により収益性が著しく悪化した資産グループについて、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失（27,951百万円）として特別損失に計上しました。その内訳は以下のとおりです。

場 所	用 途	種 類	減損損失（百万円）
キプロス	—	のれん	20,319
その他	売却予定資産等	土地及び建物等	7,631
合計	—	—	27,951

なお、当資産グループの回収可能価額は正味売却価額と使用価値のいずれか高い価額としています。正味売却価額は第三者により合理的に算定された評価額等により、使用価値は将来キャッシュ・フローを主として9.27%で割引いて算定しています。

(7) 連結株主資本等変動計算書に関する注記

① 当連結会計年度末における発行済株式の種類及び総数

普通株式

510,165,294株

(注) 当社は、2022年10月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割を行っています。

② 配当に関する事項

(i) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年6月22日 定時株主総会	普通株式	211,935	1,250	2022年3月31日	2022年6月23日
2022年11月4日 取締役会	普通株式	178,022	1,050	2022年9月30日	2022年12月1日
計		389,957			

(注1) 2022年6月22日定時株主総会の決議による配当金の総額には、役員報酬BIP信託口が保有する当社株式に対する配当金765百万円が含まれています。

(注2) 2022年11月4日取締役会の決議による配当金の総額には、役員報酬BIP信託口が保有する当社株式に対する配当金157百万円が含まれています。

(注3) 2022年10月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割を行っています。「1株当たり配当額」は株式分割前の金額を記載しています。

(ii) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
2023年6月21日 定時株主総会	普通株式	86,467	170	2023年3月31日	2023年6月22日
計		86,467			

- (注1) 2023年6月21日開催の定時株主総会の決議による配当金の総額には、役員報酬BIP信託口が保有する当社株式に対する配当金76百万円が含まれています。
- (注2) 2022年10月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割を行っています。「1株当たり配当額」は株式分割後の金額を記載しています。

(8) 金融商品に関する注記

- ① 金融商品の状況に関する事項
 当社グループは、資金運用については主として短期的な預金等とし、資金調達については銀行等金融機関からの借入又は社債によります。受取手形、営業未収入金及び契約資産に係る顧客の信用リスクは、与信管理規程等に沿ってリスク低減を図っています。投資有価証券は満期保有目的の債券及び株式であり、主に取引先企業との業務又は資本提携等に関連する株式であり、市場価格の変動リスクに晒されていますが、上場株式については四半期ごとに時価の把握を行っています。借入金及び社債についての用途は船舶や航空機、輸送関連施設等の取得に係る設備投資需要や事業活動に係る運転資金需要に対するものであり、金利変動リスクを回避するために金利スワップ等を実施しています。なお、デリバティブ取引は社内規程等に従い、実需の範囲内で行うこととしています。
- ② 金融商品の時価等に関する事項
 2023年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(i) 有価証券及び投資有価証券 (※2)			
その他有価証券	78,289	78,289	—
関連会社株式	27,080	20,096	△ 6,984
(ii) 長期貸付金	27,642		
貸倒引当金 (※3)	△ 95		
	27,547	27,499	△ 47
(iii) 社債	97,000	98,444	1,444
(iv) 長期借入金	422,691	422,162	△ 529
(v) リース債務	100,818	100,808	△ 10
(vi) デリバティブ取引 (※4)	3,719	3,719	—

(※1) 「現金及び預金」、「受取手形、営業未収入金及び契約資産」、「支払手形及び営業未払金」及び「短期借入金」については、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しています。

(※2) 市場価格のない株式等は、「(i) 有価証券及び投資有価証券」には含まれていません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりです。

(単位：百万円)

区分	当連結会計年度
関係会社株式	1,549,129
非上場株式	32,545
その他	1,335
合計	1,583,010

(※3) 長期貸付金に個別に計上している貸倒引当金は控除しています。

(※4) デリバティブ取引は、債権・債務を差し引きした合計を表示しています。

- ③ 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項
 金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しています。
 レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価
 レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価
 レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価
 時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しています。

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

有価証券及び投資有価証券

有価証券及び投資有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しています。主に上場株式、国債がこれに含まれます。一方、公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しています。主に地方債、社債がこれに含まれます。

デリバティブ取引

デリバティブ取引は、通貨関連取引（為替予約、通貨スワップ等）、金利関連取引（金利スワップ）、商品関連取引（運賃（備船料）、燃料油等）であり、時価を算定する評価技法に使用されるインプットは主に為替レート、金利、先物取引相場価格等の観察可能なインプットを用いて割引現在価値法等により算定しており、レベル2の時価に分類しています。

長期貸付金

長期貸付金の時価は、一定の期間ごとに分類し、与信管理上の信用リスク区分ごとに、その将来キャッシュ・フローとLIBOR・TORFの利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率を基に割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しています。また、貸倒懸念債権の時価は、同様の割引率による見積キャッシュ・フローの割引現在価値、又は、担保及び保証による回収見込額等を基に算定しており、レベル2の時価に分類しています。

社債

当社の発行する社債の時価は、相場価格に基づき算定しており、レベル2の時価に分類しています。

長期借入金及びリース債務

これらの時価は、元利金の合計額（*）と、当該債務の残存期間及び信用リスクを加味した利率を基に、割引現在価値法により算定しており、レベル2の時価に分類しています。

（*）金利スワップの特例処理の対象とされた長期借入金については、その金利スワップのレートによる元利金の合計額

(9) 賃貸等不動産に関する注記

① 賃貸等不動産の状況に関する事項

当社及び一部の連結子会社では、東京都その他の地域において、賃貸用のオフィスビル等（土地を含む）を有しています。

② 賃貸等不動産の時価等に関する事項

2023年3月期における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は2,638百万円（主な賃貸収益は売上高に、主な賃貸費用は売上原価に計上）、売却による損益は32百万円（売却益は特別利益に、売却損は特別損失に計上）です。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、当連結会計年度増減額及び連結決算日における時価は、次のとおりです。

（単位：百万円）

連結貸借対照表計上額			連結決算日における時価	
当連結会計年度期首残高	当連結会計年度増減額	当連結会計年度末残高		
15,443	△ 890	14,553	70,585	

(注1) 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額です。

(注2) 当連結会計年度増減額のうち、主な減少額は減価償却（526百万円）、用途変更（338百万円）による減少です。

(注3) 連結決算日における時価は、主として「不動産鑑定評価基準」に基づいて算定した金額（指標等を用いて調整を行ったものを含む）です。

(10) 1株当たり情報に関する注記

① 1株当たり純資産額 4,877円55銭

② 1株当たり当期純利益 1,993円71銭

(注) 当社は、2022年10月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割を行っています。
当連結会計年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益を算定しています。

(11) その他の注記

記載金額の表示について

記載金額は表示単位未満を切り捨てて表示しています。

(12) 重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。

(13) 追加情報

(ロシア・ウクライナ情勢について)

当社は、ロシア系海運会社との間で、LNG船保有会社へ共同出資するなどの関係がありますが、ロシア・ウクライナ情勢に伴う各国制裁に鑑み、関係者と協議しつつ対応しています。

ロシア・ウクライナ情勢は当社グループの翌連結会計年度以降の連結計算書類に影響を及ぼす可能性があります。現時点で財務上の影響を合理的に見積ることは困難です。

(当社連結子会社の株式譲渡に関する基本合意について)

当社は、本年3月に、ANAホールディングス株式会社（以下、「ANAHD」という。）との間で、当社連結子会社である日本貨物航空株式会社の全株式をANAHDに対して譲渡することに関する基本合意書を締結しました。

株主資本等変動計算書 (2022年4月1日から2023年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本							評価・換算差額等		純資産合計	
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金		繰延 ヘッジ損益
		資本準備金	その他 資本剰余金	利益準備金	その他利益剰余金						
					圧縮 記帳積立金	繰越 利益剰余金					
当期首残高	144,319	30,191	1,687	5,888	1,384	499,851	△ 3,422	679,900	28,024	△ 29,740	678,184
当事業年度中の変動額											
剰余金の配当						△389,957		△389,957			△389,957
圧縮記帳積立金の取崩					△86	86		-			-
当期純利益						600,344		600,344			600,344
自己株式の取得							△1,537	△1,537			△1,537
自己株式の処分			1				1,173	1,174			1,174
株主資本以外の項目の 当事業年度中の変動額 (純額)									3,239	△7,225	△3,986
当事業年度中の変動額合計	-	-	1	-	△86	210,473	△364	210,023	3,239	△7,225	206,036
当期末残高	144,319	30,191	1,688	5,888	1,297	710,325	△ 3,787	889,923	31,263	△ 36,966	884,221

個別注記表

(1) 重要な会計方針に係る事項に関する注記

- ① 有価証券の評価基準及び評価方法
満期保有目的の債券
子会社及び関連会社株式
その他有価証券
市場価格のない株式等以外のもの

市場価格のない株式等
- 償却原価法（定額法）
移動平均法による原価法
- 時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）
移動平均法による原価法。なお、投資事業有限責任組合及びこれに類する組合への出資（金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの）については、組合契約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を純額で取り込む方法によっています。
- ② デリバティブ取引の評価基準及び評価方法
- 時価法
- ③ 棚卸資産の評価基準及び評価方法
- 先入先出法による原価法（収益性の低下による簿価切下げの方法）
- ④ 固定資産の減価償却の方法
有形固定資産（リース資産を除く）
船舶及び建物
その他
- 定額法
定率法
ただし、2016年4月1日以降に取得した構築物については定額法によっています。
- 無形固定資産（リース資産を除く）
のれん
ソフトウェア
その他
- 20年以内の均等償却
社内における利用可能期間（5年）に基づく定額法
定額法
- リース資産
所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産
自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法
所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産
リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法
- ⑤ 繰延資産の処理方法
社債発行費
- 社債償還期間にわたり月割償却しています。
- ⑥ 引当金の計上基準
貸倒引当金
- 売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しています。
- 賞与引当金
従業員に支給する賞与に充てるため、将来の支給見込額のうち当事業年度の負担額を計上しています。
- 退職給付引当金
従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しています。
- (i) 退職給付見込額の期間帰属方法
退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっています。
- (ii) 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法
過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の

年数（8年）による定額法により費用処理することとしています。
数理計算上の差異は、各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間
以内の一定の年数（8年）による定額法により按分した額をそれぞれ発
生の翌期から費用処理することとしています。

株式給付引当金

株式交付規程に基づく取締役及び執行役員への当社株式の給付等に備えるた
め、当事業年度末において対象者に付与されるポイントに対応する当社株式の
価額を見積り計上しています。

特別修繕引当金

船舶の特別修繕に要する費用の支出に備えるため、船舶の将来の見積修繕額に
基づいて計上しています。

関係会社船舶投資損失引当金

船舶保有関係会社が調達し当社が定期備船している船舶において、収益性が著
しく悪化したことに伴い発生する損失に備えるため、将来の損失見込額を計上
しています。

契約損失引当金

定期備船契約や賃貸借契約の履行又は期限前返船等、並びに固定資産の購入に
伴い発生する損失に備えるため、将来の損失見込額を計上しています。

債務保証損失引当金

関係会社への債務保証等に係る損失に備えるため、被保証者の財務状態等を個
別に勘案し、損失負担見込額を計上しています。

事業再編関連引当金

事業の再編等に伴う損失に備えるため、将来の損失見込額を計上しています。

独禁法関連引当金

各国の競争法（独占禁止法を含む）違反の嫌疑に関連して発生する課徴金等の
支払いの見込額を計上しています。

⑦ 収益及び費用の計上基準

(i) 海運業収益及び海運業費用の計上基準

当社は、主に定期船事業、不定期専用船事業等を営んでおり、備船契約等（連続航海備船契約・数量輸送契約・個品運送契約・定期備船契約等）の契約に基づき、顧客に対して、運送サービス等を提供しており、主に一定の期間にわたり充足される履行義務であると判断しています。運送サービス（定期備船除く）の場合は、航海期間における日数に基づき、履行義務の充足に係る進捗度を合理的に見積り、収益を認識しています。なお、運送サービスのうち不定期専用船事業の一部については、一航海の船舶が発着地を出発してから帰着地に到着するまでの期間が通常の期間（運送サービスの履行に伴う空船廻航期間を含み、運送サービスの履行を目的としない船舶の移動又は待機期間を除く。）である場合には、複数の顧客の貨物を積載する船舶の一航海を単一の履行義務としたうえで、当該期間にわたり収益を認識しています。定期備船の場合は、現在までに履行が完了した部分に対する顧客にとっての価値に直接対応する対価の額を顧客から受け取る権利を有しているため、請求する権利を有している金額で収益を認識しています。

(ii) ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準

売上高を計上せず利息相当額を各期へ配分する方法によっています。

⑧ ヘッジ会計の方法

資産及び負債、予定取引における金利変動リスク、為替変動リスクあるいはキャッシュ・フロー変動リスクを相殺するためのデリバティブ取引等に対し、ヘッジ会計を適用しています。また、燃料油購入等における価格変動リスクに備えるためのデリバティブ取引についても、同様にヘッジ会計を適用しています。その方法は、繰延ヘッジを採用していますが、為替予約等のうち所定の要件を満たすものについては振当処理を、金利スワップ等のうち所定の要件を満たすものについては特例処理を行っています。

なお、借入金・社債等の金利変動リスクに対しては金利スワップ等を、金銭債権債務・在外子会社等への投資・予定取引等の外貨建取引の為替変動リスクに対しては通貨スワップ・為替予約・外貨建金銭債権債務等を、燃料油等の価格変動リスクに対してはスワップ等をヘッジ手段としています。ヘッジ有効性の評価は、毎四半期末にヘッジ対象とヘッジ手段の相場変動又はキャッシュ・フロー変動の累計の比率分析を行う方法によっています。ただし、特例処理によっている金利スワップ等については、有効性の評価を省略しています。

⑨ その他計算書類作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理の方法

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の貸借対照表における取扱いが連結計算書類と異なっています。

グループ通算制度の適用

グループ通算制度を適用しています。

(2) 会計方針の変更に関する注記

(時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用)

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。)を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することとしました。

なお、これによる計算書類に与える影響はありません。

(3) 収益認識に関する注記

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報について、「連結注記表 (3) 収益認識に関する注記」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しています。

(4) 会計上の見積りに関する注記

関係会社船舶投資損失引当金

・当事業年度の関係会社船舶投資損失引当金計上額は、64,310百万円です。

・その他見積りの内容に関する理解に資する情報

船舶保有関係会社が調達し当社が定期備船している船舶において、収益性が著しく悪化したことに伴い発生する損失に備えるため、将来の損失見込み額を計上しています。

将来の損失見込み額の算定は、当該船舶の帳簿価額、将来キャッシュ・フローの割引現在価値、正味売却価額等を基礎として行っています。将来キャッシュ・フローの基礎となる事業計画等における重要な仮定は、主として運賃、備船料等の市況、及び貨物需要等に関する将来の見通しです。

また、将来キャッシュ・フローの算定期間は当該資産グループに属する船舶平均残存耐用年数を基礎としています。採用した割引率は、主に資本コストを基礎として算定しています。正味売却価額は主に経営者が利用する専門家による評価結果を基礎として算定しています。

運賃、備船料等の市況、及び貨物需要等に関する将来の見通しが悪化した場合や船舶の評価額が低下した場合には新規又は追加の繰入を計上する可能性があります。

繰延税金資産の回収可能性

・当事業年度の繰延税金資産計上額(繰延税金負債と相殺前の金額)は、14,571百万円です。

・その他見積りの内容に関する理解に資する情報

連結注記表に記載した内容と同一です。

関係会社貸付金に対する貸倒引当金

・当事業年度の関係会社貸付金残高は517,989百万円、貸倒引当金計上額は24,134百万円です。

・その他見積りの内容に関する理解に資する情報

関係会社貸付金について、個別に回収可能性を勘案し、財務内容評価法に基づき回収不能見込み額を貸倒引当金へ計上しています。財務内容評価法を採用するに際し、債務者である関係会社の支払能力を総合的に判断しています。関係会社の支払能力は、関係会社の経営状態、債務超過の程度、事業活動の状況、今後の収益及び資金繰りの見通し、その他債権回収に関係のある一切の定量的・定性的要因を考慮することにより判断しています。

関係会社の経営状態により追加の貸倒引当金の繰入又は戻入が生じる可能性があります。

(5) 貸借対照表に関する注記

① 担保に供している資産及び担保に係る債務

(i) 担保に供している資産

船舶	6,614百万円
関係会社株式及び出資金(注)	39,883百万円
計	46,497百万円

(ii) 担保に係る債務	
短期借入金	868百万円
長期借入金	1,302百万円
計	2,170百万円

(注) 関係会社株式及び出資金39,883百万円は関係会社等の債務の担保目的で差し入れたものです。

② 有形固定資産の減価償却累計額	118,069百万円
------------------	------------

③ 偶発債務

- | | |
|-----------|------------|
| (i) 保証債務等 | 464,451百万円 |
|-----------|------------|
- (ii) 当社は、独占禁止法違反の疑いがあるとして、2012年9月以降自動車等の貨物輸送に関して海外当局の調査対象となっています。また、完成自動車車両等の海上輸送について、主要自動車船社と共同して運賃を設定したとして、請求金額を特定しないまま損害賠償及び差し止め等を求める集団民事訴訟が複数の地域にて提起されています。海外当局による調査及び民事上の損害賠償請求訴訟については、独禁法関連引当金に計上したものを除き、現時点ではそれらの結果を合理的に予測することは困難です。

④ 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務（区分表示したものを除く）

短期金銭債権	155,228百万円
長期金銭債権	549,453百万円
短期金銭債務	131,770百万円
長期金銭債務	1,617百万円

(6) 損益計算書に関する注記

関係会社との取引高

営業取引による取引高	
営業収益（海運業収益、その他事業収益）	123,033百万円
営業費用（海運業費用、その他事業費用、一般管理費）	251,364百万円
営業取引以外の取引による取引高	546,743百万円

(7) 株主資本等変動計算書に関する注記

当事業年度末における自己株式の種類及び株式数

普通株式	1,984,669株
------	------------

(注) 当事業年度末における自己株式数には、役員報酬BIP信託が保有する自社の株式が450,459株含まれています。

(8) 税効果会計に関する注記

- ① 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因
繰延税金資産の発生の主な原因は、関係会社船舶投資損失引当金等であり、繰延税金負債の発生の主な原因は、その他有価証券評価差額金等です。
- ② 法人税及び、地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理
当社は、当事業年度から、グループ通算制度を適用しています。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」（実務対応報告第42号 2021年8月12日）に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っています。

(9) 関連当事者との取引に関する注記

子会社及び関連会社等

(単位：百万円)

属性	会社等の名称	議決権等の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引 金額	科目	期末 残高
子会社	日本貨物航空株式会社	所有 直接100%	資金の援助	資金の回収 (注1)	61,198	短期貸付金 (注2)	316
				利息の受取	971	長期貸付金 (注2)	117,067
子会社	NYK/バルク・プロジェクト株式会社	所有 直接100%	資金の受入	資金の受入 (注3)	21,233	預り金	41,672
				利息の支払	31	その他流動資産	177
子会社	TIGER LNG SHIPPING PTE. LTD.	所有 直接100%	資金の援助	資金の貸付 (注4)	17,893	長期貸付金	17,893
				利息の受取	329	その他流動資産	51
子会社	SAGA SHIPHOLDING (NORWAY) AS	所有 間接100%	資金の援助 債務保証等	資金の貸付 (注4)	4,158	短期貸付金	2,281
				利息の受取	1,634	長期貸付金	36,109
				債務保証等 (注5)	20,551	その他流動資産	725
子会社	YUSEN TERMINALS LLC	所有 間接100%	債務保証等	債務保証等 (注5)	17,475	－	－
				保証料の受取	90	その他流動資産	90
子会社	NYK ITF(CAYMAN) LTD.	所有 間接100%	資金の援助 債務保証等	資金の融通 (注6)	23,992	現金及び預金	23,992
				債務保証等 (注5)	65,542	－	－
子会社	船船保有・貸渡関係会社 222社	所有 直接100% (222社)	資金の援助 債務保証等 備船契約 造船契約の譲渡	資金の貸付 (注4)	47,349	短期貸付金 (注2)	49,036
				リース債権・投資資産の回収 (注7)	6,553	長期貸付金 (注2)	186,376
						リース債権 (一年内)	16,155
						リース債権 (一年超)	72,626
						リース投資資産 (一年内)	6,115
						リース投資資産 (一年超)	18,606
				利息の受取	9,853	その他流動資産	2,358
				備船料の支払 (注8)	125,067	営業未収金	2,087
						営業未払金	8,462
						繰延及び前払費用	139
関連会社	TAMANDARE OWNING B.V.	所有 直接20%	増資の引受	増資の引受 (注10)	20,817	－	－
関連会社	MERO 2 OWNING B.V.	所有 直接15.5%	債務保証等	債務保証等 (注5)	31,903	－	－

取引条件及び取引条件の決定方針等

- (注1) 資金の貸付条件については、市場金利を勘案して決定しています。なお、担保を受け入れています。
- (注2) 子会社への貸付金に対し、合計18,201百万円の貸倒引当金を計上しています。また、当事業年度において、合計46,547百万円の貸倒引当金戻入額を計上しています。
- (注3) 資金の受入条件については、市場金利を勘案して決定しています。なお、担保は差し入れていません。
- (注4) 資金の貸付条件については、市場金利を勘案して決定しています。なお、担保を受け入れていません。
- (注5) 債務保証等については、保証形態を勘案して保証料を設定しています。
- (注6) グループ会社間のキャッシュ・プーリングに係るものです。
- (注7) リース料については、対象資産のコスト相当額を勘案して決定しています。
- (注8) 子会社で発生したコスト相当額を備船料として支払っています。
- (注9) 固定資産の売却価格については、市場価格を勘案して決定しています。
- (注10) 1株につき85,570USDドルで引き受けたものです。

(10) 1株当たり情報に関する注記

①	1株当たり純資産額	1,739円97銭
②	1株当たり当期純利益	1,182円09銭

(注) 当社は、2022年10月1日付で普通株式1株につき3株の割合で株式分割を行っています。
当事業年度の期首に当該株式分割が行われたと仮定して、1株当たり純資産額、1株当たり当期純利益を算定しています。

(11) 連結配当規制適用会社に関する注記

当社は連結配当規制適用会社です。

(12) その他の注記

記載金額の表示について

記載金額は表示単位未満を切り捨てて表示しています。

(13) 重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。

(14) 追加情報

(ロシア・ウクライナ情勢について)

当社は、ロシア系海運会社との間で、LNG船保有会社へ共同出資するなどの関係がありますが、ロシア・ウクライナ情勢に伴う各国制裁に鑑み、関係者と協議しつつ対応しています。

ロシア・ウクライナ情勢は当社の翌事業年度以降の計算書類に影響を及ぼす可能性があります。現時点で財務上の影響を合理的に見積ることは困難です。

(当社子会社の株式譲渡に関する基本合意について)

当社は、本年3月に、ANAホールディングス株式会社（以下、「ANAHD」という。）との間で、当社子会社である日本貨物航空株式会社の全株式をANAHDに対して譲渡することに関する基本合意書を締結しました。